ブロンズ像で よみがえる…越後七浦観音像

開眼式は九月末を予定

台座から下され、安置された観音像の上半身部分（59年7月）

〝ご参拝の皆様へ〟

観音像に参拝いただきまして厚くお礼申上げます。

この観音像は長い間お像の御厨子にて、そのお寺様にて、お苦心してまいりましたが、とりあえず御座よりおろして安置する。ことにいたしました。

折角、参拝下さる皆様に申訳けない、ことと存じますがご了承下さるようお願い申し上げます。

昭和五十七年十二月吉日

越後七浦観音奉賛会

長年の風雨による損傷で、昭和57年12月末に台座からはずされていた間瀬・行道の越後七浦観音像がいよいよ、よみがえる。

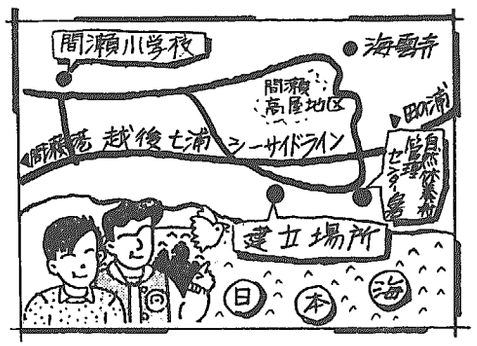
昨年８月、観音像再建発起人会（会長・金子誠一村長）が発足し、村内・外から浄財を募っていたが、これまでに目標（２,000万円）を大きく上回る浄財が集まり、このほど像本体を業者に発注した。

遭難者の冥福、家内安全、交通安全、商売繁盛、魚霊供養、水子供養などの祈願像として信仰を集めてきた観音像が、９月末にはよみがえることになった。

今月は、この越後七浦観音像に焦点をあててみた――――。

●建立場所全景●

写真手前のバス停のうしろ側（センター白岩手前）になる



●建立位置図●

現在製作中の新・越後七浦観音像の上半身部分。うしろの人物と比べるとその大きさがわかる。（60年５月18日撮影＝高岡市・梶原鋳造所で）

傷みひどく 分割・安置

今までの観音像は、越後七浦シーサイドラインの田の浦駐車場から山中に入った、旧間瀬銅山製練所跡付近に越後七浦観音奉賛会が中心になって、昭和四十六年八月に建てられた。

八㍍の高さの台座に乗った八・五㍍の白亜の合掌像が周囲の緑の木々に白一色の美しい姿をうつし、弥彦山スカイラインからも望め、行楽客からも親しまれていた。

ところが、長年の風雨（特にしおかぜのため）で傷みが激しくなり、倒壊の危険が出て来たため、五十七年十二月末に像はひき下ろされた。合成樹脂と石こうで作られた観音像は、背中の部分がパックリ傷口をあけ、胸から上の合掌部分が元の台座の下に（前ページ写真参照）、さらに下半身部分、魚の部分と三つに分割され安置されていた。

再建は、像の製作者の早川亜美さん（昭和五十五年没）が亡くなっているうえ、資金面などでも問題があり、めどが立たなかった。

再建発起人会発足 浄財を募る

しかし、「村のシンボルとしてもなんとか復活させよう」との声が高まり、昨年八月十七日、越後七浦観音再建奉賛会設立準備委員会（三地区区長代長など三十八人）を設立、村や観光協会、間瀬漁協など各団体に呼びかけ、同二十七日観音像再建発起人会（百二十五人）が発足した。

同再建発起人会では、その後数回協議を重ね、像の大きさや仕様、位置などを決め、十一月末から村内の個人や各団体に募金を呼びかけ、目標額二千万円を超える三千五百十二万円（五月二十二日現在）を集めた。資金面でのめどが立ったことから、今年二月、像の製作を美術銅器で有名な富山県高岡市の梶原鋳造所（梶原正作伝統工芸士）に二千六百万円で依頼した。

ブロンズ像に決定 センター白岩前に

再建される観音像は、再建募金趣意書では台座高さ五㍍、本体二㍍と以前より小さく、ブロンズ（青銅）像か石像に生まれ変わる予定であったが、予想以上の募金が集まったことから同再建発起人会では、再建する像をブロンズ像にし、高さ八㍍と決め、寄付者に案内をした。

今までの像は合成樹脂と石こうで、風雨とくに塩分を含んだ海の風に弱かったところから、ブロンズに生まれ変わるが、大きさと形は全く同じ。安置されていた今までの像は、型をとるため既に業者の手元に移されている。

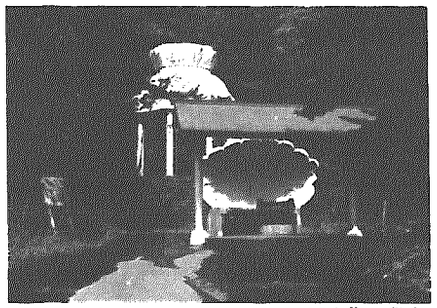
製作中の新しい像はほぼ外観が出来上がり（写真＝左上）、今後、色塗り（青銅色に）や継目など細部の仕上げがかけられる。そして、現在、設計中の高さ三㍍の台座に乗り、四ヵ月後の九月末には開眼式を行う計画。

建立地は、やや不便だった、これまでの山中から引っ越し、越後七浦シーサイドライン沿いの村自然休養村管理センター白岩（間瀬七区）前の緑地に移される。

今までの場所は〝奥の院〟としてそのまま保存していく予定とのこと。

＊　＊　＊

魚の上に乗った珍しい観音像が、二年余りの〝ブランク〟を経て、九月末には「観光のシンボル」としても、よみがえることになった……。



今までの建立地＝型をとるために観音像は業者の手元にあるため、ポッカリ穴があいたようになっている。〝奥の院〟的存在として保存される予定とか…（５月11日撮影）